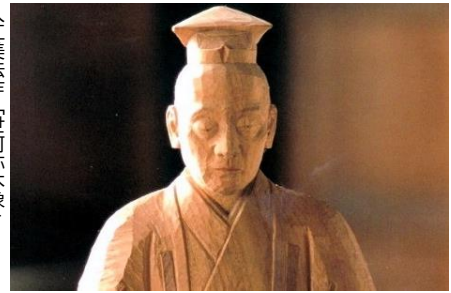


初心忘るべからず



入江美法作「世阿弥木像」
(HP「タカラブロ」より)

世阿弥の言葉

能は今日、格式高い伝統芸能として位置づけられています。しかし、当時は庶民的な芸能の一つでした。

世阿弥の父・観阿弥は、これまでの猿楽に歌や舞いを積極的に取り入れ、華やかな「能」へ作り替えました。その結果、観阿弥の一座は爆発的な人気を博します。そして、ついには室町幕府3代将軍・足利義満に召し抱えられるという破格の

3年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

今号は、有名な格言「初心忘るべからず」を紹介しています。この言葉は、能楽師・世阿弥が編み出したものです。今では「初めの志を忘れてはならない」という意味で使われていますが、世阿弥が意図するところは、少々違うようです。

待遇を受けることになります。世阿弥はこのとき12歳、美しく利発な少年だったと伝えられています。

1378年、京都祇園祭。数で見えていた義満の横に世阿弥が呼ばれたことがありました。ところが、その様子を批判した貴族がいました。世阿弥は「乞食の所行をする者」（被差別民）であり、将軍ともあろう人がそのような者を横に置くとは何事だというのです。その貴族は能という芸能は認めな

がらも、それを生み出した観阿弥・世阿弥たちを差別していました。

観阿弥が亡くなったのは、世阿弥22歳のころ。そのころから世阿弥は、のちの世代に引き継ぐため、能のシステムをまとめ始めます。それが『風姿花伝』です。当時新しい芸能であった能を、自分たちで真の芸能へと引き上げ、なおかつ子孫に秘伝書として残す……それは必死な作業であり、差別との闘いだったのではないのでしょうか。

「初心」の考え方は、世阿弥晩年に記した『花鏡』で完成させ

れました。世阿弥にとつての「初心」とは、新しい事態に直面した時の対処方法、すなわち、試練を乗り越えていくことを意味します。つまり、「初心を忘れるな」とは、人生の試練の時に、どうやってその試練を乗り越えていったのか、その経験を忘れるなどということなので

す。

3年生の皆さん、中学卒業後からが自分を試す勝負です。これまでの経験が財産です。応援しています。

(NHK「100分de名著」他より)

【世阿弥の3つの「初心」】(『花鏡』より)

是非初心忘るべからず
若い頃に失敗や苦勞の結果、身につけた芸は、常に忘れてはならない。それは、後々の成功の糧になる。若い頃の初心を忘れては、能を上達していく過程を自然に身につけることができず、先々上達することはとうてい無理というものだ。

時時初心忘るべからず

年齢とともに、その時々積み重ねていくものを「時々の初心」という。若い頃から最盛期を経て老年に至るまで、その時々にあった演技方をするのが大切だ。しかし、その場限りで忘れてしまつては、次に演ずる時に、何も身につかない。過去に演じた一つひとつの風体を、全部身につけておけば、年月を経たとき、すべてに味が出るものだ。

老後初心忘るべからず

老齢期には老齢期にあった芸風を身につけることを「老後の初心」という。老後になっても初めて遭遇する試練がある。歳をとったからといって「もういい」ということはない。だから、その都度、乗り越えなければならない。